

M&A専門誌

Mergers & Acquisitions
Research Report

MARR マール

2008 November 11月号

発行人 高橋 豊
Yutaka Takahashi

編集長 川端 久雄
Hisao Kawabata

制作進行 加藤 順子
Junko Kato

表紙写真 十文字 美信
Bishin Jumonji

アート
ディレクション イシザキ ミチヒロ
Michihiro Ishizaki

デザイン 斎藤 圭太
Keita Saito

本文写真 福本 敏雄
Toshio Fukumoto

印刷 三松堂印刷株式会社

発売元：株式会社レコフ
株式会社レコフデータ

発行所：株式会社レコフデータ

〒102-0083 東京都千代田区麹町4-1-1

麹町ダイヤモンドビル

TEL.03-3221-4942

2008年11月1日発行 通巻169号

雑誌18321-11

定価2,310円 **本体2,200円**

 RECOF

編集室から

BOOK

『失われた民主主義

—メンバーシップからマネージメントへ—

シーダ・スコッチボル著、河田潤一訳

慶應義塾大学出版会 2800円（本体）



民主主義とは、市民社会にある民意を政治に汲み上げ、経済や社会の公共政策に反映させることである。米国は、建国以来、民主主義の模範だった。それが今、失われている。草の根の民意を反映する仕組みがなくなったからだというのが、大統領選も終盤に入ったが、米国社会の底流の変化を知ることが出来る。

サブタイトルにある「メンバーシップからマネージメント」にその意味が込められている。これまで米国の民意形成の土台の役割を果たしてきたのがメンバーシップ（会員）からなる自発的結社である。市民運動家は大草原に点在する町に結社の支部をおき、州や全国レベルの本部を組織した。様々な結社がつくられ、人々はこぞって参加した。結社を通じて兄弟愛を育み、広大な国土の見知らぬ人とも結びついた。農夫、事務員、実業家といった異なる階級の人々がクラブで対等に交流した。結社は連邦制度の代表制ガバナンスになぞってつくられる。それぞれの段階で代表に選ばれるには、自己の意見を述べ、支持を取り付けなければならない。民主主義の学校の役割を果たしてきたのだ。

この結社が1960年代を境に衰退に向かう。代わって登場したのが権利主張団体（アドボカシー団体）である。専門家が運営（マネージメント）する団体である。彼らは手数料がかかる会員組織化に力を入れない。支持者にダイレクトメールを送りつけるだけで、会員同士の友愛には関心がない。運動目標は、環境、フェミニズムなど狭い分野に特化する。財政的基盤は、免税措置を受ける民間財団からの助成だ。財団に寄付するのは、時間を使うより金を使うことを好む大富豪や経済的エリートである。従って、アドボカシー団体は、社会の上層部の意向に沿う主張を公共政策に反映させる機関になる。運動家は財団の覚えだけを気にすればよい。選挙や説明責任もない。民主的な性格の弱い組織になった。

こうして、米国は、弱者への思いやりを失い、社会的不平等が拡大する国家になってしまった。この変化を象徴する例として、1944年の復員兵援護法案の成立と90年代前半の医療保険改革法案の失敗を挙げる。どちらも時代の最重要課題だった。前者は第二次世界大戦に従軍した復員兵の援助を目的としたもので、全国規模のメンバーシップ結社の在郷軍人会がロビー活動をし、史上最も寛大な社会立法実現の原動力となった。後者は、国民全員に少額でも医療保険の受給権を保障しようというもので、クリントン政権が成立を目指した。ところが、社会の上層部を代弁するアドボカシー団体が阻止活動を展開しただけで、ついに大衆レベルの支援運動は起こらず、「天下分け目の立法」は実現しなかった。

著者は公民権運動、ベトナム戦争の苦い経験などがメンバーシップ結社の権威を失墜させたことなどを挙げている。米国民主主義の再興のため、メンバーシップ結社を活発にし、草の根民主主義を呼び戻すことを願って本書を終えている。米国の市民社会の伝統と比べ、日本はどうか。市場経済主義的な考え方が入ると、あっという間に格差社会になってしまう。日本はまだ市民社会、民主主義の構築の段階にあるのだと実感させられた。（青）

編集後記

いつものことだが、インタビューが終わりに近づくと、残り時間を気にしながら駆け足で人物像の話に移る。事前にその人のイメージをつかみ、質問をするのだが、自分と交わる部分に焦点を当ててしまう。私より遥かに社会的地位も高く、充実した人生を歩んできた方々でとても足下に及ばないと思いながら、次第に親近感も湧いてくる。時々、傲慢にもひょっとして相手の側に自分が座っていたかも知れないと、錯覚してしまうこともある。結局、インタビュー記事は相手を客観的に描いているようでいて、実はインタビューする自分のことや叶わぬ夢が投影されているのだろう。写真家の撮る肖像写真もそうかもしれない。（開）

本誌の記事およびデータの著作権は原則として株式会社レコフデータに帰属します。いかなる目的であれ当社に無断で本誌記事の複製、引用、転載等を行うことを禁じます。また、本誌記事の情報は、当社が信頼できると考える各方面から取得しておりますが、その内容の正確性、完全性が保証されているものではありません。当社は本誌記事に起因して被った損害については、その内容如何にかかわらず一切の責任を負いません。乱丁・落丁の場合はお取り替えいたします。03-3221-4942までご連絡ください。